内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

（1）名　　前：岸田　直子（きしだ　なおこ）執筆名ハムダなおこ
（2）年　　齢：57 歳
（3）参加事業：第 14 回「東南アジア青年の船」事業（1987 年）
　　第 2 回「世界青年の船」事業（1990 年）（管理部通訳）
（4）職　　業：日本 UAE 文化センター代表、作家、翻訳家、エッセイスト

■応募のきっかけ

友人が「東南アジア青年の船」事業（以下「東ア船」という）に参加したことがきっかけでこの事業を知り、23 歳のときに参加しました。大学では中南米について学んでいて、メキシコに留学したり、探検隊に入って中南米の国々を周ったりしていました。留学から戻り、自分はアジアのことをあまり知らないということに気付き、東南アジアの生活を知り、人々と交流をしてみたいと思いました。短い期間により多くの人と出会えるプログラムがないか探していたところ、東ア船のプログラムを知り、長い時間を共有し寝食を共にすることで、人間同士の奥深くまで知ることができると期待して、事業に応募しました。

「人間同士の奥深くまで知る」とは、具体的にどんなことでしょうか。

探検隊では、チームでいろいろなところに出かけて行って、テントを張ったり、ハンモックを吊ったりして共同生活をします。24 時間一緒に生活していると、人の良い面も悪い面も、強い面も弱い面も見えてきて、人間の奥深くを知り、同時に自分のことも知ることができます。東ア船では、食べることや寝ることなど基本的な社会生活を通して、船の中で与えられた役割を一つ一つこなしていくうち、特定の国の人たちの行動が、民族としての特性なのか、あるいはその人個人の個性なのかを判断する手がかりを学ぶことができました。

例えば、私のキャビンメイトは 11 歳まで読み書きができなかったと言っていました。現代にそんな人がいるのかと驚いたのですが、その国では 11 歳まで読み書きができないのが平均的なのか、あるいは、彼女が特殊な環境にいただけなのかということを考えるきっかけになりました。また、もう一人のキャビンメイトは自称「女優」で、大学の助教授でありながらキャビンの中でも歌ったり踊ったりする人でした。その国には全体としてそういう性格の人が多いのか、あるいはそれは彼女の個性なのかということもよく観察しました。全体と個人を比較対照できたのは非常によかったと思います。留学先や旅行先でたまたま出会った人を見て、国全体、あるいは国民全体がそうなのだと判断するのは危険です。全体を見ながら同時に個々の人を知ることができたのは、船の中で 2 か月間時間を共有したおかげで、他のプログラムではこういう経験はなかなかできないと感じました。

■事業参加経験が自分自身のキャリアパスに特にプラスになったこと

共通言語（英語）を使って自分の意見を主張すること、また人の意見を聞くことです。当時は自分のキャリアやスキルにこのプログラムがどれほど影響を及ぼすかは考えていませんでした。長い目で見て自分の人生にプラスになるとだけ考えていました。

東ア船では、東南アジアの人々は強く個を主張せず、他人を責めず、さまざまな問題を解決しようとする姿勢が印象的でした。第 2 次大戦中に敵味方であったにせよ、1980 年代までに欧米と肩を並べるほど成長した日本を尊敬し、アジアの先駆者であると認めてくれていました。

管理部通訳として乗船した「世界青年の船」事業（以下「世界船」という）では、ヨーロッパ勢、アフリカ＋中東勢、アジア勢、日本人と、それぞれの主張が船の中で大きく対立していたことが記憶に残っています。当時は 3 か月間という長期間のプログラムだったこともあり、後半には、それぞれの民族でも譲れないことが出てきて、**さまざまな主張が対立**を生むこともありました。しかし、それが世界の現実だと知らされました。

私は現在ドバイ在住で、ドバイのような多人種社会で生活し世界中の人々と交わるとき、彼らの考えや主張には、必ず**彼らなりの理、背景、事情がある**ことを知りました。その上で、一つの規律でまとめ上げ、活動を続けるにはどのような工夫が必要か、深く考えるきっかけになりました。

■内閣府の事業でしか得られない経験

船事業は全員が同じ条件のもと、船という新しい社会に適応しなければなりません。長期間にわたり、24 時間寝食を共にし、密接にかかわります。隠れるところもなければ、表面だけいい顔をし続けることもできません。自分の立場や思想、趣向、志などを見失わず、相手の立場を慮りながら、**新しい社会に新しい秩序を作り上げていかねばならないのです。**それは既存する社会に外国人を連れてくる状況では、決して生まれません。新しい社会をゼロから創り上げる船事業だからこそ、できることです。

船上で「新しい秩序」を作った具体的な事例がありますか。

日本政府主催の事業ではありますが、船内では日本のルールだけが適用されるわけではなく、全く新しい世界に全員が同じ条件で入ってくることになります。全員が自分の国を背負って、プライドや文化を守りながら、同時に他者と譲り合いながら、新しい社会を作っていきます。1 か月くらいの期間だったら、もうすぐ船を降りるんだから我慢しようという気持ちで過ごせるかもしれません。しかし、当時の世界船は 3 か月間もありましたから、このような気構えでは通用しませんでした。

私が世界船に乗って最初に驚いたのは、プログラム期間が長いから、みんなの共通のお休みを日曜日にすると言われたことです。すぐに次の寄港地に到着する東ア船では、こういう決まりはありませんでした。また全員がアジア人の東ア船では、食事の味付けも大きな問題にはなりませんでした。しかし、世界船では、食事の時間でも激しい主張が繰り広げられました。決められた夕食時間は 18 時半でしたが、自分たちの国ではそんな早い時間に夕食をとらないから、20 時半に 4 食目を出してくれと青年たちが言うのです。もちろん、そんな予算は予め組まれてはいませんでした。同じように、シャワーの時間、就寝の時間でも、譲れないことがある人たちがいました。こんなことがいちいち問題になるのかと思うようなことばかりでした。

参加女性の制服が一律スカートだったことにも驚かれました。ある特定の地域や宗教の女性は、膝から下の肌を見せず、普段パンツで過ごしています。そういう人たちに選択肢を与えず、スカートだけを支給したことは、管理部の勉強不足でもありました。このように生活上の様々な出来事や決まり事が、船上に新しくできた多様な社会で問題提起され、話し合われ、時間をかけて相互理解につなげていくよう努力された経緯があります。エゴや対立や主張を乗り越えて、白紙の状態のところに新しい社会を作っていくのは、私にとって稀有な体験でした。

民間・NPO 等が主催する事業や留学と異なる点とは何だと思いますか。

スポンサーの影響が少ないことです。この事業は、日本政府が行う事業ではありますが、**すべて管理部の言うとおりに行動しなければならないというものではなく、**参加者の主体的な行動が重視されています。また、結果や成果を**短期間で出す必要がない**ことも挙げられます。例えば、冒険旅行にはスポンサーがつき、到達しなければいけない目的地、決められた期間

があります。また留学は、個人の学歴やキャリアアップが目的で、周囲の社会とはそれほど深く関りません。それに比べ、船事業には明確かつ究極のゴールがなく、あえて言えば、共存への道筋を将来にわたって個々に考えさせるのが主旨です。

管理部員として乗船したとき、私たちが特に意識していたのは、けがや事故がなく、プログラムの破綻や崩壊がなく、最終目的地までみんなで無事に到達させることでした。そして、これは船事業の最大の目標であると同時に、人類の最大の目標でもあると感じました。人類が行きくべき目的地は、何かすばらしい成果を上げ続ける場所でも、ただの桃源郷的な世界でもなく、多少の不満を抱えながらも皆が平和に共存していくことではないかと、いつも考えています。

長期的に見た結果や成果にはどのようなものがあると思いますか。

プログラムに参加したからといって、その**経験をみんなが自分の人生に活かしているかはわかりません**。社会の中で船での体験を基に活躍していける人もいれば、ただ自分の心の糧にして日々を過ごす人もいます。それが目に見える形で出てくる人と、心の引き出しの中に留め、長い人生の中で時々取り出して思い返すという味わい方をしている人もいます。でも、この船事業は参加者に必ず何かをもたらしていると思います。

これらの交流プログラムを 30 年以上も実施してきたという実績が、日本政府の財産です。世界中から日本のプログラムに参加者が集まってくれる事実は、日本政府にとって何にも代えがたい、お金では買えない大きな財産であると私は思っています。当初に比べて参加国はどんどん増え、世界中の若者がセレクションに合格してこのプログラムに参加したいと夢を描いています。かつて戦争で敵味方に分かれた国々とも、また宗教や文化をまったく異にする国々とも、こうした地道な努力によって信頼関係を築いてきました。**日本政府のプログラムだから参加する**、日本のプログラムなら参加しても大丈夫だという認識が、世界中の人々の中に根付いていることは、非常に大きな成果です。私のように何十年も前に船に乗った人間が集まると、「あの時、日本政府がこうした事業をやってくれたから、私たちは人生のすばらしい部分を共有することができた」とよく話し合っています。

■「船」事業を継続すべき「今日的意義」とは

世界中の人とバーチャルにつながれる世界になっても、実際に場所と時間と人生の一時期を共有することは全く違います。バーチャルはスウィッチを押すだけで、一瞬で、今まで構築したことからも、責任からも断絶できます。しかし船の事業は、次の港に着くまではその環境から逃れられないのです。そこに**個人の責任や覚悟やコミットメントが必要になってきます**。**世界を動かしていくのは常に若者**で、彼らが将来どんな花を咲かせ実を結ぶかは、実際には誰もわかりません。しかし、そこに肥料をやり、水を与えなければ、咲ける花も咲かないのです。船の事業には多大な予算がかかるのは承知していますが、決して無駄な予算ではありません。船を用いた国際交流の強み・意義とは、同じ経験をした者同士が、長きにわたり世代を超えて交流していけることだと思います。

自分自身のキャリアパスに特にプラスとなったプログラムは何ですか。

各国のさまざまな問題、あるいは世界共通の問題を討論した、グループごとのディスカッションです。私が東ア船に乗ったのは、1987 年のことでした。タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ブルネイ、シンガポール、日本が参加していました。当時、ディスカッションでテーマになっていたのが、タイの児童労働でした。幼い子供たちが過酷な環境で労働に駆り出されているが、どうすればなくせるのかについて真剣に話し合いました。この 30 年間でタイは目覚ましく発展し、自分たちの得意分野で活躍するようになりました。例えば UAE では、タイと言えば美容です。マッサージやネイル、美顔などのビューティー関連の産業で大勢のタイ人が働いています。みんなきれいにお洒落して、すてきですよ。また、フィリピンのスモーキーマウンテンに住む子供たちにいか

に教育の機会を与えるか、というテーマもありました。貧困から子供たちを救うには教育しかないと話し合いました。今では世界中の飲食・エンターテインメント業界で、フィリピン人が活躍しています。ドバイでは、フィリピン人は接客業がうまいと高く評価されています。このように、30 年間で世界の多くの国から貧困が撲滅されていったことを、自分の目で見るのは大きな喜びです。2021 年のドバイ万博では、貧しかった国々が目覚ましい発展を遂げてすばらしい展示をしているのを見て、感無量になりました。

しかし、別の問題が増えているのも事実です。当時は、「自然を守ろう」という話はディスカッションの重要なテーマではありませんでした。パームオイルのために森林を切り開いて、オランウータンがいなくなるという話はありましたが、社会の発展のためにはしかたがないというのが共通認識だったのです。それが現在では、SDGs でも目標とされているように環境破壊は深刻な問題で、これが話題にならない国はありません。

ディスカッションによって世界の問題が解決されたわけではありませんが、話し合った内容が何十年間も参加青年の記憶に残って、日々の生活の中で各自が努力を続ける動機付けになったところに、そのすばらしさがあると思います。

■事後活動について

私は 2008 年春にＵＡＥで「日本 UAE 文化センター」を創設し、14 年間活動を続けてきました。このセンターは自分一人で始め、今でもボランティアの手助けを借りながら、私が中心となってやっています。なぜ 14 年間続けてこられたかというと、自分が得難い経験をしたことへの恩返しは、次の世代に同じように自分がしてあげることだと思っているからです。

日本人はボランティアに対する意識が様々です。ただの簡単なお手伝いだと思う人もいれば、すべて手弁当でやるべきでお金をとってはいけないと考える人もいます。若い世代には、手伝う代わりに謝礼や車代が出るかと訊いてくる人もいます。時代の流れと共にボランティアの価値観も変容しており、それを認識し、活動に反映させていくのは大きな課題です。しかし、誰の心の底にも、社会貢献の気持ちと、海外で日本について発信したいという気持ちがあり、それを尊重するのが基本だと感じています。

私はまず、お手伝いを申し出る方には、いったいどこまで活動にコミットメントしたいのか細かく尋ねます。専業主婦なのか勤務しているのか、お子さんがいるなら手伝えない時間帯があるのか。自分の車で来られるのか等です。依頼の仕方も重要で、例えば、お琴を弾きたいという人がいたら、自分でプログラムを組んで全てに責任を持ってやりたいのか、あるいは、私がセットアップしたプログラムの中で演奏だけしたいのかなどで、それぞれの希望を尊重します。

なんらかの形で社会に恩返ししたいという気持ちは誰にもありますが、しかし気持ちだけでは継続できません。お金も必要だし、楽しみながらやることも重要です。また時代、場所、対象に合わせて適切なゴールを設定することも大事で、こうした加減を知るまでが大変でした。人の気持ちを尊重すること、周りの人たちとゆるくつながり、やりたいことと環境が整ったらパッとやることが事業を続けるコツだとも、おいおいわかってきました。

センターを運営する上で私が一番大切にしていることは、参加する全員が楽しむことです。ボランティア活動は絶対にやらなければいけないことではありませんから、目標やゴールをあまり高く設定せず、「そこそこ楽しかったね」と思えるような活動が、長続きの秘訣だということも学びました。

■事業参加時の国際的・地域的な人的交流

事業に参加してから 24～30 年間くらいは、まったく船の関係者と関わることがありませんでした。それは自分の人生が大変な時期だったからです。2014 年に、「世界青年の船」事業の事後活動の一つである **Global Assembly（GA）に参加**

してから、船の関係者との交流が再び始まりました。2017 年のドバイ GA では、プログラムの一つである事後活動の報告会で、「日本 UAE 文化センター」設立の経緯を紹介させてもらいました。

2014 年の Global Assembly に参加したきっかけは何でしたか。

世界船で一緒に通訳をしていた方に誘われました。ＧＡの日程は、ちょうど息子が兵役に就く初日で、なおかつ末娘が大学に入学する日だったので、最後まで悩みましたが、どういうわけかトルコ行きのチケットを買ってしまいました。とても行けないと思いながらも、もうチケットを買っちゃったし、やっぱり行くことにしました。トルコへの道すがら、私はまだ息子と娘のことを心配していましたが、トルコに着いて参加者の皆さんに会ったら、うわぁ、船の世界そのままだ！と、UAE のことはすっかり忘れてしまいました。

初めての GA は、内容やプログラムがどういうものか全然知らなかったのですが、毎回参加している人たちがリーダーシップをとってくれました。30 年前に船に乗っていたときは誰とどんな付き合いをしたかなんてもう覚えていませんので、新たな友達との出会いと同じでした。そのうちにみんなが思い出を話し始めて、「そうそう、あなたは通訳だった人だよね」と声をかけてくれたり、「あの時こういうことがあったけど、覚えている？」、「そうだった、そうだった！」と盛り上がったりして、急激に親近感が増していきました。

その後何度か GA に参加しながら、仲間と出会う喜び、自分が参加できることへの感謝をいつも感じています。下船から何十年後に会おうとも、私たちは「船に乗った」という経験を共有しています。またいつ会えるか分からないけれど、GA のようなプログラムが続いていく限り、自分たちには仲間がおり、集う場所があるというすばらしさを痛感しています。

岸田直子氏プロフィール

日本 UAE 文化センター代表、翻訳家、エッセイスト。早稲田大学文学部卒。学生時代は米国・メキシコに留学し、英国の科学調査探検隊オペレーションローリーに参加など、さまざまな国際交流団体に所属して活動。1987 年、第 14 回「東南アジア青年の船」事業に日本参加青年として参加。1990 年 第 2 回「世界青年の船」事業に通訳として参加。そこで出会った UAE 参加青年と結婚して UAE に移住。5 人の子どもを育てる。2008 年～ 独力で日本 UAE 文化センターを創設し、地域社会に日本文化を、日本にアラブ文化を広める活動を始める。2011 年～ 東日本大震災を機に日本ムスリム協会と協働して慈善活動を続ける。2012 年『祖母のはなし』で第 8 回文芸思潮エッセイ賞受賞。2013 年『アラブからこんにちは』を出版。2015 年『アラブからのメッセージ―私が UAE から届けた「3・11」への支援』で第 3 回潮アジア太平洋ノンフィクション賞を受賞。2016 年『ようこそアラブへ』出版。2021 年『アラブに自殺、イジメ、老後不安はない』出版。2003 年『シャヒード、100 の命―パレスチナで生きて死ぬこと』翻訳。2018 年ドバイ首長の本を翻訳。